

集合論ノート 0013 Nice name.

近藤友祐 (@elecello_)

初稿: 2018/10/07 修正: 2018/10/15

この文書の場所: <https://elecello.com/works.html>

本稿では、特に断りの無い場合、 M は ZFC の ctm, \mathbb{P} は poset とし、 $\mathbb{P} \in M$ を仮定する。

定義 1. $\tau \in \mathbf{V}^{\mathbb{P}}$ とする。 $\vartheta \in \mathbf{V}^{\mathbb{P}}$ が τ の部分集合に対する nice name であるとは、 ϑ が

$$\vartheta = \bigsqcup_{\sigma \in \text{dom}(\tau)} (\{\sigma\} \times A_\sigma) \quad \text{where 各 } A_\sigma \text{ は } \mathbb{P} \text{ の反鎖} \quad (1)$$

の形をしていることをいう。ただし、各 $\sigma \in \text{dom}(\tau)$ について、ただ一つの A_σ が対応していると考える。□

注意 2. ϑ が「 τ の部分集合に対する nice name」であっても、 $\vartheta_G \subseteq \tau_G$ とは限らない。例えば、 $\tau = \{\langle \mu, q \rangle\} = \{\mu\} \times \{q\}$, $\vartheta = \bigcup_{\sigma \in \text{dom}(\tau)} (\{\sigma\} \times A_\sigma) = \{\mu\} \times A_\mu$ で $A_\mu = \{r\}$ のときとか。但し $r \in G$, $q \notin G$ とする。このとき、 $\{\mu_G\} = \vartheta_G \not\subseteq \tau_G = \emptyset$ となる。□

補題 3. $\mathbb{P} \in M$, $\tau, \mu \in M^{\mathbb{P}}$ とする。このとき、 τ の部分集合に対する nice name ϑ で、

$$\mathbb{1} \Vdash \mu \subseteq \tau \rightarrow \mu = \vartheta \quad (2)$$

なるものが存在する。すなわち、どんな集合のどんな部分集合に対しても nice name がつけられる。

Proof. 各 $\sigma \in \text{dom}(\tau)$ に対し、 $A_\sigma \subseteq \mathbb{P}$ を (i) A_σ は \mathbb{P} の反鎖, (ii) $\forall p \in A_\sigma (p \Vdash \sigma \in \mu)$, (iii) A_σ は (i)(ii) のようなもののうち $\mathcal{P}(\mathbb{P})$ で極大、となるように作る。

Claim 1. これは可能。

[\cdot] $\sigma \in \text{dom}(\tau)$ を固定せよ。まず、 $B_\sigma := \{p \in \mathbb{P} : p \Vdash \sigma \in \mu\}$ と定める。定義可能性補題より $B_\sigma \in M$ である。 $\mathcal{A} := \{A \in \mathcal{P}(B_\sigma) : A \text{ は } \mathbb{P} \text{ の反鎖}\}$ と定める。 $\emptyset \in \mathcal{A}$ なので $\mathcal{A} \neq \emptyset$ である。 \mathcal{A} が \subseteq に関する極大元をもつことを示す。そのために鎖 $\mathcal{C} \subseteq \mathcal{A}$ を勝手に取る。 \mathcal{C} が \mathcal{A} に上限を持つことを示す。それは $A^* := \bigcup \mathcal{C}$ である。何となれば、まず $A^* \in \mathcal{A}$ を示す。 $A^* \subseteq B_\sigma$ は明らか^{*1}。 A^* が \mathbb{P} における反鎖であることを示すために $p, q \in A^* (p \neq q)$ を勝手に取る。 A^* の定義より、ある $A_1, A_2 \in \mathcal{C}$ が存在して $p \in A_1, q \in A_2$ 。 \mathcal{C} の全順序性を用いて $A_0 := \max\{A_1, A_2\}$ とすれば、 $p, q \in A_0 (= A_1 \text{ or } A_2)$ である。 A_0 は \mathbb{P} における反鎖なので $p \perp q$ を得る。 $A \in \mathcal{C} \implies A \subseteq A^*$ なので上限性は明らか。以上より、 \mathcal{A} の任意の鎖が \mathcal{A} に上限を持つことがわかった。よって M の Zorn の補題より \mathcal{A} は極大元をもつ。それを $A_\sigma (\in \mathcal{A})$ とせよ。これが所望のものである。というのも、(i) は $A_\sigma \in \mathcal{A}$ から明らか。(ii) については $A_\sigma \subseteq B_\sigma$

^{*1} $x \in A^* = \bigcup \mathcal{C}$ なら、ある $A \in \mathcal{C} (\subseteq \mathcal{A} \subseteq \mathcal{P}(B_\sigma))$ が存在して $x \in A$ 。 $A \in \mathcal{P}(B_\sigma)$ より $A \subseteq B_\sigma$ 。 $x \in A \subseteq B_\sigma$ より $x \in B_\sigma$ 。

であり, B_σ の任意の元は $\sigma \in \mu$ を force するのでよい. (iii) は, もし $A_\sigma^+ := A_\sigma \cup \{q\}$ ($q \in \mathbb{P}$) が A_σ の真の拡大であつて (i)(ii) を満たすなら, (ii) より $A_\sigma^+ \subseteq B_\sigma$ であることと (i) を合わせて $A_\sigma^+ \in \mathcal{A}$ である. すると $A_\sigma \subsetneq A_\sigma^+$ で, これは A_σ の \mathcal{A} における極大性に矛盾. \square (Claim 1)

これらの A_σ ($\sigma \in \text{dom}(\tau)$) を用いて, 求める ϑ は

$$\vartheta = \bigsqcup_{\sigma \in \text{dom}(\tau)} (\{\sigma\} \times A_\sigma) \quad (3)$$

で表される. これを見よう. 示すべき式 $\mathbb{1} \Vdash \mu \subseteq \tau \rightarrow \mu = \vartheta$ は, \Vdash の定義により, 「 $\mathbb{1}$ を含む任意の generic filter G による generic 拡大 $M[G]$ でコレコレが成り立つ」と同値である. $\mathbb{1} \in G$ は常に満たされるので, 結局, 任意の generic 拡大 $M[G]$ でコレコレが成り立つことをいえばよい. $M[G]$ を任意の generic 拡大として, $M[G] \models \mu_G \subseteq \tau_G$ を仮定する (want: $M[G] \models \mu_G = \vartheta_G$).

$\boxed{\mu_G \supseteq \vartheta_G}$ $a \in \vartheta_G$ を勝手に取る. $(\cdot)_G$ の定義より, ある $\langle \sigma, p \rangle \in \vartheta$ が存在して $a = \sigma_G$, $p \in G$ が成り立つ. ϑ の定義より $\sigma \in \text{dom}(\tau)$, $p \in A_\sigma$ である. $\sigma \in \text{dom}(\tau)$ に対する A_σ の定義の (ii) の条項により, $p \Vdash \sigma \in \mu$ を得る. $p \in G$ と真理補題より $\sigma_G \in \mu_G$, すなわち $a \in \mu_G$ を得る.

$\boxed{\mu_G \subseteq \vartheta_G}$ $a \in \mu_G$ を勝手に取る. 仮定 $\mu_G \subseteq \tau_G$ と合わせて $a \in \tau_G$ である. したがって, ある $\sigma \in \text{dom}(\tau)$ が存在して $a = \sigma_G$ である. この $\sigma \in \text{dom}(\tau)$ を固定する. poset に関する一般的事実*2より, (A) $G \cap A_\sigma \neq \emptyset$ であるか, (B) $\exists q \in G \forall p \in A_\sigma (q \perp p)$ である. (B) の場合. この $q \in G$ を固定する. $a = \sigma_G \in \mu_G$ なので, 真理補題より, $r \Vdash \sigma \in \mu$ なる $r \in G$ がとれる. G の filter 性より, $s \leq q, r$ なる $s \in G$ がとれる. 拡大補題より $s \Vdash \sigma \in \mu$ である \dots (**). いま $A_\sigma \cap G = \emptyset$ なので, $A_\sigma^+ := A_\sigma \cup \{s\}$ は A_σ の真の拡大となっている. (i) A_σ^+ は \mathbb{P} の反鎖である: $p \in A_\sigma$ たちは incompatible なので, s と $p \in A_\sigma$ が incompatible であることを確かめればよい. もしも共通拡大 $\mathbb{P} \ni t \leq s, p$ があれば $t \leq s \leq q$ と合わせて $q \not\perp p$ となるが, これは (B) に反する. (ii) $\forall t \in A_\sigma^+, (t \Vdash \sigma \in \mu) : A_\sigma$ の元についてはよいので $t = s$ のときを調べればよいが, これは (**). 以上より A_σ^+ は A_σ の真の拡大で (i)(ii) を満たすので, これは A_σ の極大性に反する. よって (B) は起こり得ない. したがって (A) である. このとき元 $p \in G \cap A_\sigma$ が取れる. $\sigma \in \text{dom}(\tau)$ に注意すれば $\langle \sigma, p \rangle \in \{\sigma\} \times A_\sigma \subseteq \vartheta$ となり, $\langle \sigma, p \rangle \in \vartheta$ である. $p \in G$ なので $\sigma_G \in \vartheta_G$ となり, $\sigma_G = a$ だったので $a \in \vartheta_G$ を得る. \square

補題 4. $\tau \in \mathbf{V}^{\mathbb{P}}$ を固定し, $\kappa := |\mathbb{P}|$, $\lambda := |\text{dom}(\tau)|$, $\mathbb{P}: \theta^+$ -cc, $\kappa, \lambda, \theta \geq \aleph_0$ とする. このとき, τ の部分集合に対する nice name は $\kappa^{\lambda \cdot \theta}$ 個以下しか存在しない.

Proof. まず $\theta < \kappa$ の場合. $\aleph_0 \leq \theta^+ \leq \kappa$ なので [5] Lemma I.13.19 の諸公式が使える. θ^+ -cc より, 反鎖は $|\kappa|^{<\theta^+} = |\kappa|^{<\theta^+} = |\kappa|^\theta = \kappa^\theta$ 個以下しかない. nice name を一つ定めるには, 各 $\sigma \in \text{dom}(\tau)$ のそれぞれについて反鎖を選べばよい. よって nice name の総数は函数 $\text{dom}(\tau) \rightarrow (\mathbb{P}$ の反鎖たち) の総数のことだから, $(\kappa^\theta)^\lambda = \kappa^{\lambda \cdot \theta}$ 個以下. $\theta \geq \kappa$ の場合. θ^+ -cc より, 反鎖は $|\kappa|^{<\theta^+} = |\kappa|^{\leq \theta} = |\kappa|^{\leq \kappa} = |\mathcal{P}(\kappa)| = 2^\kappa$ 個以下なので, nice name の総数は $(2^\kappa)^\lambda$ 個以下である. $(2^\kappa)^\lambda \leq (2^\theta)^\lambda \leq (\kappa^\theta)^\lambda$ なので, これは $\kappa^{\lambda \cdot \theta}$ 個以下でもある. \square

*2 M が ZFC の推移的モデルで $\mathbb{P} \in M$, $E \subseteq \mathbb{P}$, $E \in M$, $G: (M, \mathbb{P})$ -generic ならば, (A) $G \cap E \neq \emptyset$, または, (B) $\exists q \in G \forall p \in E (q \perp p)$ である. 証明は集合論ノート 0010 を参照.

参考文献

本稿では、主に [5], Ch.IV, §3 を参考にしました。対応する定理番号の明記は行っていません。

- [1] Devlin, K., *The Joy of Sets: Fundamentals of Contemporary Set Theory* (2nd ed.), Undergraduate Texts in Mathematics, Springer, 1993.
- [2] Jech, T., *Set Theory: The Third Millennium Edition, revised and expanded*, Springer Monographs in Mathematics, Springer, 2002.
- [3] Kunen, K., *Set Theory, An Introduction to Independence Proofs*, Vol. 102. Studies in Logic and the Foundations of Mathematics, North-Holland, 1980. 邦訳 [13].
- [4] Kunen, K., *The Foundations of Mathematics*, Vol. 19. Studies in Logic: Mathematical Logic and Foundations, College Publications, 2009. 邦訳 [14].
- [5] Kunen, K., *Set Theory* (rev. ed.), Vol. 34. Studies in Logic: Mathematical Logic and Foundations, College Publications, 2011.
- [6] Schindler, R., *Set Theory, Exploring Independence and Truth*, Universitext, Springer, 2014.
- [7] Shoenfield, J.R., *Mathematical Logic*, Addison-Wesley, 1967.
- [8] Takeuti, G. and Zaring, W.M., *Introduction to Axiomatic Set Theory* (2nd ed.), Vol. 1. Graduate Texts in Mathematics, Springer, 1982.
- [9] Weaver, N., *Forcing for Mathematicians*, World Scientific Publishing, 2014.
- [10] 新井敏康, 数学基礎論, 岩波書店, 2011.
- [11] 菊池誠, 不完全性定理, 共立出版, 2014.
- [12] 倉田令二郎・篠田寿一, 公理的集合論, 倉田令二郎監修・数学基礎論シリーズ 2 巻, 河合文化教育研究所, 1996.
- [13] K. キューネン (藤田博司訳), 集合論-独立性証明への案内, 日本評論社, 2008. [3] の邦訳.
- [14] K. キューネン (藤田博司訳), キューネン数学基礎論講義, 日本評論社, 2016. [4] の邦訳.
- [15] 田中一之編・著, 数学基礎論講義, 日本評論社, 1997.
- [16] 田中一之編, ゲーデルと 20 世紀の論理学 4 集合論とプラトニズム, 東京大学出版会, 2007.
- [17] 田中一之・鈴木登志雄, 数学のロジックと集合論, 培風館, 2003.
- [18] 田中尚夫, 公理的集合論, 現代数学レクチャーズ (B-10), 培風館, 1982.
- [19] 田中尚夫, 選択公理と数学-発生と論争、そして確立への道 (増訂版), 遊星社, 2005.